



鹿児島ユナイテッドFCの試合で フードドライブ活動実施

経済学科 平出ゼミ

経済学科の平出ゼミ 2年生9名が、11月13日に白波スタジアム（鹿児島市）で行われた鹿児島ユナイテッドFCのホーム最終戦で、余っている食品を集めて子ども食堂へ寄附するフードドライブ活動を行いました。

平出ゼミは、社会経済的な分析能力と統計データの解析技術を身に付けることを目標に活動しています。今年度後期は課題解決型のフィールドワークとして、「鹿児島をスポーツで盛り上げたい」「食品ロス問題を解決できないか」の2つの学生の提案を掛け合わせた本企画を実施しようと、約1カ月前から広報活動や受け入れの準備を行ってきました。当日は、試合会場前に広がる多くのキッチンカーに並びテントを構え、キックオフ前の約3時間にわたり、会場に訪れたサポーターなどから寄せられた合計約20kgの食品を受け取りました。学生は食品の受付や記録、仕分け作業を行い、今季最多の来場者数となっ

た熱気あふれる鹿児島ユナイテッドFCのホーム最終戦も観戦しました。

また、今回集まった食品は鹿児島県の子ども食堂を支援している団体「たくして」を通して、県内の子ども食堂に届けました。12月6日にはゼミ生全員で鹿児島市卸本町にある事務局を訪問し、代表の園田愛美氏から「たくして」の活動内容や事業の課題等の話を伺い、離島の子ども食堂へ発送する食品の仕分け作業のボランティア活動も行いました。

平出講師は「学生が地域の課題に対してどのようにアプローチするかを考え、積極的に活動してくれた。今後はフィールドワークを通して新たに出てきた疑問や課題に対してデータ分析をしたり、経済学的に解決方法を考え関係機関に提案を行うなども視野に入れ継続した活動を行ってきたい」と話しています。



本学附属図書館で 謎解きイベントを開催

国際文化学科 松尾ゼミ

国際文化学科の松尾弘徳准教授のゼミ生30名が、8月に本学附属図書館を舞台とした謎解きイベント「おとぎの図書館殺人事件からの脱出」の企画・運営を行いました。

この企画は産学官地域連携センターが認定する地域フィールド演習の一環として開催され、まずクイズに数問答えると図書館所蔵の1冊の本にたどり着くところから始まりました。実際に館内を巡り探し出した本には、犯人特定につながるヒントや新たな謎が挟まっており、徐々に答えを導き出していくという内容。答えを探しながら図書館の様々な施設を探検することができるように工夫されており、参加した学生や地域住民ら約30名は、



地下にある書庫やパソコンコーナー、DVDの視聴ブースなどを歩きながら謎解きに挑戦することで、本学附属図書館の魅力が認識できるようになっていました。

企画・運営に携わった国際文化学科3年の鮫島真乃介さん（鹿児島玉龍高校出身）は、「コロナ禍で昨年度はイベントを開催することができなかった。温めてきた企画をようやく実施でき、来場者の方々が楽しんでくれたことに大変満足している」と充実した様子。担当の松尾准教授は、「謎解きイベントは様々な地域、会場との親和性・汎用性があり、地域活性化にも大いに活用できる」と話しています。

なお、この企画は企画団体 SpiceProject 代表の井上健悟氏の協力を得て実施されました。



認知症を理解し、 支える地域に

社会福祉学科 岩崎ゼミ



各自治体では、認知症高齢者等の生活を各地域で支えるための地域包括ケアシステムの構築が進められています。その一環として、社会福祉学科岩崎ゼミでは、12月16日にゼミ生(3・4年生)21名を対象に「認知症サポーター養成講座」を開催しました。この講座は、鹿児島市健康福祉局長寿あんしん課の協力のもと、昨年に引き続き実施しています。今年度は、現役の看護師であるキャラバン・メイト(専門講師)の方にお越しいただき90分間の講義を聴講しました。講義内容は、認知症の理解、認知症の方の気持ち、認知症の人と接する時の心構え、予防、家族の気持ちの理解などで、教材テキストとDVDを用いながら説明がなされました。学生からは、「現場の

講師の方であったので、認知症の方々への対応がイメージしやすかった」「認知症を正しく理解し、支える地域づくりを目指していくために、私たちにできることは何か、考える機会にもなった」などの感想が寄せられました。

受講後は、認知症サポーターの証となる「認知症サポーターカード」が配布され、21名の「認知症サポーター」が誕生しました。地域で認知症の方やそのご家族に対してできる範囲で手助けする認知症サポーターとして、地域で認知症理解を広げていきたいです。

文：岩崎ゼミ4年

小倉朋也・寺田優哉・蘭田龍玄・田中皓祐・石場郁弥

指宿・山川で フィールドワーク

～鯉節製造と「道の駅」に学ぶ～

経済学科 松本ゼミ



10月22日(土)、経済学科の松本ゼミの2・3年生15名が指宿市を訪れ、地域経済の現状と課題について理解を深めるために、特産品の鯉節の製造現場と地域産業振興の拠点となる「道の駅」でフィールドワークを行いました。

山川港の(有)坂井商店では、坂井弘明社長から鯉節の製造工程や指宿鯉節のブランド化の取り組み、産地である枕崎や焼津との違いなどについて説明していただきました。その後、指宿市役所山川庁舎へ場所を移して鯉節削りを体験。山川水産加工業協同組合の野村参事から鯉節製造にともなって出る廃棄物の肥料化の取り組みや海外展開の苦労などについてお話をうかがいました。

指宿市商工水産課の竹内主幹と大小田主査からは市内にある二つの「道の駅」の設置経緯や運営体制、コロナ禍前後の経営などについて、ふるさと納税室の上田室長からは農業を含む地域産業の現状と地元産品の販路開拓などの振興策についてお話をうかがいました。その後、道の駅山川港活お海道と道の駅いぶすきを訪れ、店舗や周辺施設の様子、品揃えの特徴などについて視察しました。

学生は次のような感想を述べています。

「鯉節といえば枕崎のイメージだったが、指宿の鯉節についても知ることができました。地域が生き残っていくためには関東・関西への産品の出荷が大切だということ学びました」(経営学科2年 高江冬馬)、「鯉節を削るのは初めての経験でしたが、想像していたよりも簡単で楽しかったです。指宿市による生産者支援の取り組みは、産品と消費者とを繋ぐ素晴らしいものだと感じました」(経済学科3年 堂原歌乃)、「地域振興について様々な取り組みや当事者の方々の思いを聞くことができました。昨今の円安の影響はピンチではあるが逆にチャンスとも言えるという言葉が印象的でした」(経済学科2年 前嶋健吾)、「指宿の鯉節は都市部を中心に販路拡大を進めていることを知りました。後日、大手コンビニで「指宿産の鯉節使用」と強調されたおでんを見つけ、取り組みの拡大力に感心しました」(経済学科3年 平井千聖)

訪問先では質問に丁寧にご対応いただき、指宿市の地域産業について理解を深めることができました。提供していただいた資料も参考にしながら、フィールドワークの成果はレポートにまとめる予定です。